

先見経済

Management & Economic Information SENKEN KEIZAI Since1938

先見TOPインタビュー

「『価値観』に着目すれば 会社の経営と人の幸せは両立できる」

作家、経営心理学者 飯田史彦

聞き手/株式会社プロ・アクティブ代表 山口哲史

特集

「適正な人件費」が 本当に強い会社をつくる

人件費管理と報酬戦略の進め方

人材パワーアップコンサルティング株式会社 代表取締役 二宮靖志

好評連載

森田実の温故知新 森田実
小さな大企業 宇恵義人

作家、経営心理学者

飯田史彦

聞き手／山口哲史 株式会社フロ・アクティブ代表

「価値観」に注目すれば

会社の経営と

人の幸せは両方できる

今回のゲストは、経営心理学者の飯田史彦氏。作家としての顔も持ち、経営学の視点から人の心理を解き明かそうとした著書『生きがいの創造』（PHP研究所）シリーズの売上は総計170万部を超える。氏が「価値観」や「生きがい」という考え方にたどり着いた経緯、経営学者としての思想に耳を傾けてほしい。

人生の岐路で
与え続けられた導き

山口 先生が経営学者になられたきっかけは何だったのですか。

飯田 実は、私の転職には、なぜかいつも自分を導いてくれるものがあるのです。

例えば大学進学では、高校生のころ、自分の祖父が亡くなる直前、「天皇陛下のお膝元に行け」という遺言を残しました。最初は意味がわかりませんが、恩師に相談すると、学習院大学に行け、という意味ではないのかと。それで、「どうしても遺言に従わねば」と思い、東京に出て学習院大学に行くことを決意したのです。

山口 おじい様を尊敬されていたのですか。

飯田 いえ、会話すらほとんど交わさない関係でしたが、何か運命的なものを感じたんですね。

山口 経済学部に進まれたきっかけは。

飯田 実は、以前から中高の社会科教師になろうと決めていたので、ビジネスマンになるつもりはありませんでした。でも、高校の英語教師だった父に相談すると、「この仕事は楽しいが、数十年後自分の姿が見えてしまう。お前には将来大きな夢が持てるような仕事につける学部に行ってほしい」と言うのです。それがきっかけでした。

山口 大学に進学されても、先生になる意志は変わりませんでしたか。



【ホスト】山口哲史 Yamaguchi Tetsushi

1961年兵庫県生まれ。関西学院大学商学部卒業後、リクルートなどを経て90年、現（株）プロ・アクティブの前身のフィールド・アクティブを設立。竹100%でできた繊維など自然でピュアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる（ラディアンス）」力のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。
http://www.pro-active.co.jp

飯田 ええ。夢を叶えるために、日本中のさまざまな都道府県や私立校で試験を受けたのですが、全滅してしまいました。筆記試験は合格しても、なぜか面接で落ちてしまっただけです（笑）。その後、大学院に進んでからも毎年試験を受けたのですが、結果は同じ。人並みの返事をしているつもりなのにいくら受けてもよい評価が得られない。本当に、自分は人から評価されない人間なんだと落ち込みました。

山口 経営学者を意識されるようになったのはその後ですね。

飯田 博士課程に進んだとき、心に「経営学を通して、人の幸せについて研究しなさい」と聞こえたのです。

山口 信じられないような現象ですね。

飯田 私も驚きました。私は修士課程で経営戦略論を専攻していた身です。当時、経営学と人の幸せが結びつくなど、夢にも思いません。でも、なぜか「従わねばならない」と感じてしまった。

それで調べてみると、アメリカには「コーポレートカルチャー」という企業文化の概念があることがわかりました。たまたま読んだその論文には、「人の価値観が会社をつくりあげる」「どんな価値観を持つかによって、ビジネスの種類や結果にも違いが生

まれる」と書いてある。それを見て、人の幸福観や人生観を含めてビジネスを考えられるのではないかと気づき、テーマを変更したので。それから、自分なりに文献を集め、論文を書いて学会で発表しはじめました。

山口 当時の日本では、すごい発見ですね。

飯田 実はそのころ、アメリカではコーポレートカルチャーが大ブームになっていました。キリスト教国家であるアメリカでは、ビジネスで得られる利益の多くが社会福祉に使われる。そんな背景から、人間の価値観とビジネスを結び付ける概念が受け入れられやすかったのでしょう。

ところが、ご指摘の通り、当時の日本には専門家がいません。私はまだ25歳でしたが、一躍最先端テーマの専門家として学会でも着目されるようになりました。そして、内定をいただいた大学のなかから福島大学を選んだのです。

山口 何か理由はあったのですか。

飯田 信じがたいでしょうけど、そのときもまた、心に声が聞こえたのです。結果、27歳で国立大学の助教授になることができ、ようやく「人間の価値観」をキーワードに、会社経営と人間の幸せを結びつけた研究ができるようになりました。今では、あれは天からいただいたポストだったのだと信じています。

山口 なにか、ロジックでは表しがたい導きのようなものを、確かに感じますね。

学問的に理解されなかつた「前例を見ない」論文

山口 先生は著書がいくつもおありですね。

飯田 助教授になってから数年後、「スピリチュアルな概念を用いた研究をしよう」という気持ちで心に浮かびました。そして生まれたのが、「生きがいの夜明け」。人間の存在意義や、人間はなぜ生まれてきたのか、ということについてまとめた経営学の研究レポートです。世界各国のさまざまな学術論文を引用しながら、きちんと経営学に結びつけて書きましたので、学術的な体裁は成しているものでした。とはいえ、前例のない種類の論文であったことは間違いありません（笑）。

山口 どんな内容だったのですか。

飯田 以前から、ビジネスの現場で悩み苦しんでいる方に新しい人間観やビジネス経営観をお話すると、みなさんなぜか急に元気になられることがありました。そこで、新たな思考法を身につければ、自分の存在意義や経営の意味を見出しながら生きていけるのではと考え、そうした現象を学術的に分析したのです。しかし、それが大きな反響を巻き起こしてしまいました。

山口 どういった反応だったのですか。

飯田 絶賛と批判の両方です。当時、私は福祉施設でボランティアもしていたので、そうした施設の方に読んでいただけたらと思います。論文の最後に思いつきで連絡先を載

日本にも、多様な価値観を認め合える文化が生まれればよいですね